

「大用国師について」要旨

2015/8/31

講演者 横田南嶺老師

昭和39年 和歌山県新宮市に生まれる
昭和58年 筑波大学入学,在学中に龍雲院で出家得度する
昭和62年 筑波大学卒業,京都建仁寺僧堂に掛搭(修行のため編入)
平成 2年 福岡県梅林寺僧堂に転錫
平成 3年 円覚寺僧堂に転錫
平成11年 円覚寺僧堂師家に就任
平成22年 円覚寺派管長に就任

著書に「青松閑話」、「延命十句観音教のはなし」「いろはにほへとある日の法話より」などがある。DVDに「精一杯生きよう」がある。

講演の概要

1. 円覚寺の歴史と盛衰

弘安5年無学祖元による開山以来730年の歴史がある。
創建以来、北条氏をはじめ朝廷、幕府の篤い帰依を受けてきたが
建武の中興に伴う禅宗滅亡の危機、全山消失を含む幾たびかの火災、
明治初頭の廃仏毀釈など外部要因による危機に加え江戸時代後期には
僧侶が寺で博打などをするほどの墮落による内部要因による危機を経験してきている。
建武の中興の危機は夢想国師による後醍醐天皇への応対、
廃仏毀釈時の危機は今北洪川老師による一般大衆への禅の普及などにより危機を克服してきた。内部要因による危機から円覚寺を再興したのが大用国師・誠拙周檮禪師であった。

2. 江戸時代後期の仏教界と円覚寺

江戸幕府は1612年にキリスト教禁止令を出し以後キリスト教の弾圧を進める。国民が仏教徒であることを寺より証明してもらう寺請制度の始まりとなる。この寺請の任を負ったのは本末制度における末寺である。現存する寺のほとんどがこの時期に建立されたとされている。この寺請制度は檀家制度となり檀家は寺院への経済的支援を背負うこととなる。寺院の安定的経営を可能にしたが逆に信仰・修行などの本分をおろそかにして寺院経営に勤めるようになり僧侶の乱行や僧階の金銭売買などに繋がっていった。円覚寺もこのような内部からの衰退が進行していた。
かつての座禅を行う修行道場は塔頭などで分散化して行われ、規律は緩み、飲酒、博

打が行われるほど墮落していた。このような状況下で白隠禪師・保元禪師など禪の本分を求める僧は円覚寺などを訪問することがないほどであった。

3. 大用国師による円覚寺再興(講演と一道和尚の居士林だよりより)

こんな危機的状況の中で円覚寺再興すべしという志を持つ数人が手を組み現在の保土ヶ谷区にある法林寺の師匠月船禪師より円覚寺再建を命じられたのが28歳の大用国師・誠拙周檮禪師であった。誠拙禪師は、円覚寺に行くが、そのあまりのひどさに挫折し、師匠のところに戻る。

帰ってきた弟子に師匠である月船禪師は「お前を見損なった」と言う。そこには、「お前にはどんなひどい状況の円覚寺でも再建できる力があるとわしが認めたから、それを命じたのにおめおめと帰って来おって！自分で自分を見限るな！」という思いがあったのだと思われる。それをきいた誠拙禪師は、発憤し円覚寺に戻り、博打打ちをするお坊さんたちにお茶だしをすることから始めて、10年かけて徐々に周りを感化していき、37歳で僧堂師家に任じられ、41歳の時(1785)に円覚寺正統院内に一撃亭を新築、開山無学祖元五百年遠諱を営み見事に再興を成し遂げた。

4. 円覚寺再興後の活動年譜

円覚寺再興後も日本各地で精力的な活動を続ける。

- 1793 53歳 紀州興国寺に法燈国師五百年遠諱
- 1806 62歳 武蔵山田廣園寺開山俊翁令山和尚四百年遠諱
- 1807 63歳 建長寺天源院大応国師五百年遠諱
- 1809 65歳 横浜玉泉寺に隠居後上洛して相国寺にて「夢窓録」を提唱
- 1813 69歳 天竜寺にて「碧眼録」を提唱
- 1814 70歳 母安子逝去、菩提の為西国三十三所巡礼、翌年巡礼を果たす
- 1820 76歳 相国寺から新僧堂師家の拝請に応じ僧堂開単「碧眼録」を提唱したが体調すぐれず6月28日相国寺にて遷化

5. 遺偈・和歌など(配布資料より)

●遺偈

「老僧二十七歳月船古仏の慈愛を以て初めて円覚寺に登り凡そ五十年間正統僧堂にあって只仏法を以て人の為にするを我が任となす」

●庭菘

草木にもこころありけり われ見よとけさ咲きそむる庭の白菘

●なき母を悲しみて

音つれていさめたまいしことのはのふかき恵みをくみて泣けり

子を捨てし親のころを忘れなば奈落は袈裟の下にこそあれ
たらちねのながきわかれの手向けはいやつしまん我身ひとつを

●教え

つみあるも罪なきひとほとけぞとすればすなわち佛なりけり

以上